

エナクティビズムの検討

——知覚における実存概念の再評価

佐藤義之

一 エナクティビズム

エナクティビズム (Enactivism) と呼ばれる学派が認知科学において勃興し、心理学や哲学等の諸学にも影響を与えている。エナクト (enact) とは広義には行動の遂行であるが、ヴァレラら——「エナクティブ」という語をこの意味で使い始めたのは彼らである——は知覚を「行動」であると見なす。つまり知覚は受動的なものでなく、能動的な身体的行動だという。彼らはさらにその行動の歩みが「道を作る」という点を強調する⁽¹⁾。つまり心と世界はあらかじめ独立にあり、知覚とは世界の情報が心に伝わり生まれるという常識的な見方を批判して、「エナクティブな見方によれば、……心と世界はエナクションにおいて一緒に生まれてくる」⁽²⁾とヴァレラらは主張する。知覚という行動によって、知覚意識の内容も、また、そもそも世界自体も、生物にとって意味のあるも

のとして初めて成立する。もちろん、物理的な世界は知覚以前からあるに違いない。しかし物理的に同じ世界でも生きる環境としては生物それぞれにとって異なった意味をもつ。つまり世界は生物が何を求めてそこにいるかによって違ったものとしてあるのであり、世界とは生物が作り出すものである。知覚もそのような世界から自己にとって有意義な情報を能動的に収集する行動であって、受動的に感覚器官に伝わる情報の集積ではない。

このような観点からエナクティビズムは、視覚をそのつどのスナップショットをもとに脳内に詳細な表象を構成するものと考えた古くからの見方を批判する。私はそのような静止画像から情報を取り出すのではない。私が目や手、体を動かしながら対象について集めた情報こそ知覚を形作る。もちろんそのためには、身体のかじかの運動が知覚をどう変えるか、身体運動に対する感覚の依存関係（感覚運動依存性

(Sensorimotor dependencies) (c) の知識が前提される。また、その知識によって知覚が媒介されていることを知覚者自身が自覚していなければならない (AP66/99) (4) という。

エナクティビズムはかなり広範な流れを包括しており、分野をまたぐさまざまな研究者がいろいろな立場から主張を展開している。その全体を包括する議論を展開する力は私にはないし、またそういう議論は内容希薄なものにならざるをえない。そのため便宜上以下ではもっぱら代表的論者のひとり、哲学者としてエナクティビズムの一翼を担っている A・ノエの主著であり、翻訳もされている『知覚のなかの行為』(5)を手がかりに論を進める。彼の立場は先に挙げたヴァレラやその流れを汲む人たちとは一定の距離がある。ノエは生や実存というような、現象学者が知覚を分析する際に重視した概念に対して冷淡である(6)が、むしろ私はそういったある意味「古い」概念を手がかりに彼への批判を展開するつもりである。なお、エナクティビズムにおいても、このような概念を重視する論者もいる(7)。それゆえ私の批判はエナクティビズム全体に向けられているわけではない。また、ノエの議論のすべてに批判を向けているわけでもない。今後さまざまな方向に展開する可能性をもつエナクティビズムにおいて、批判すべきひとつの傾向に注意を促し、そのことで逆に、先述の実存や生という語がエナクティビズムにおいて果たしうる意義を照らし出すことが私の意図である。

二 「知覚的現前の難問」

そのときどきにあたえられる網膜像は一種のスナップショットのような詳細なものであつて、視覚とはそこから受動的に詳細な内的表象が形成されることによって実現されている——こういうスナップショット的な発想を、エナクティビズムは最初期から批判してきた(8)。この静的、絵画的内的表象観については、エナクティビズム誕生よりはるか前にすでにメルロ＝ポンティも批判を向けていたが(9)、エナクティビズムは新たなさまざまな実験結果に依拠して、新たにこのような説を否定する。たとえばもし私が詳細なスナップショットに基づく詳細な表象をもっているとすれば、視野の細部の変化に容易に気づくはずである。しかし注意の中心を外れたところでの変化については、大きな変化でも気づかない(「不注意盲」)。このことは周辺部において解像度がかなり低くなり、色覚も乏しくなるといふ眼球の構造ひとつをとっても、当然の結果である。

また、そもそも簡単に現実世界にアクセスできるのに、どうして詳細な脳内表象を作成する必要があるのか。脳内に構築され記憶にとどめられた表象に情報を求めるのでなく、目前にある外界に直接情報を求めればよいであろう。その意味で、脳内に記憶された表象を利用するよりも、いわば「外部記憶」(10)として世界そのものを利用する方が賢明なのである。脳内表象にそれを求めるのは脳資源の使用の面ではまったく不経済なやり方である。

しかしスナップショット説も何の根拠もなく主張されていたわけではない。ノエによれば、その説の事象的裏付けと考えられていた事柄があり (AP62/94)、スナップショット説を退けるなら、その事柄の新たな説明が必要になるといふ。

その事柄とは、「世界が私たちに全詳細において現前しているという感覚」 (AP60/91) を私がついていくのである。私が観光地で撮った、光景が隔々まで明瞭に写っている写真を見たとき、私もこのとき光景をこのような明瞭さで見ていたと思いがちである。光景が隔々まで私に明瞭だったと感じているのである。これを、反スナップショット説が批判する、脳内表象の利用と混同してはならない。今問題になっているのは、明確な脳内表象をもつことではない。そうではなく、外の世界そのものが詳細かつ全面的に現前しているという主観的な感覚をもつことである。もちろん先の考察から、実際にはそういうものが現前していないことは明瞭である。だとするとどうして私は全体の詳細な現前感をもつのか。ノエはこの疑問を「知覚的現前の問題」 (AP59/91) と呼ぶ。

この問題へのノエの回答は次のようなものである。この一種の錯覚はウェブ上の情報が手元のパソコンのなかにあると錯覚することと同様である。私はウェブ上の情報を読むためにその都度情報をダウンロードしてそれにアクセスしている。しかし即座にダウンロードできるため、あたかも手元のパソコンのなかに情報がすべて蓄えられているかのような錯覚を感じることもさへある。この場合、全情報がヴァーチャルに私に現前しているのだと言える。同様に、世界の細部は今、明

確に見えているわけではない。しかし視線をそこに向ければ明確な細部が即座に、あたえられる。すべての細部の現前はウェブ上の情報と同様にヴァーチャルである。しかし、細部をすぐにでも知ることができるということが、すべての詳細が今、現前しているという錯覚を生んでいるのだという (AP50/77)。

ノエは非様相的 (amodal) 知覚の一部 (AP61-62/93-94) ①としてこの問題を理解しようとする。非様相的知覚とは、知覚していないはずの部分がある意味「知覚している」という事態のことである。私がトマトを見るととき、背面を除く半分以上が見えていない。にもかかわらず、私はトマトを三次元的で球形のものとして見る。私は隠れている部分も含めて全体を見ているといえる。見えない部分がある意味「見る」ことができる理由を、ノエは先述の「知覚的現前の難問」の場合と同様に説明する。つまり、トマトを見るととき、私が背面をのぞき込もうと体を動かせば（あるいはトマトが何かの理由で少し回転すれば）即座に隠れている部分が見える。ウェブの情報の場合と同様、即座にアクセスできるという意識が、隠れている部分が現前しているかのような一種の「錯覚」を生む、つまりその部分をヴァーチャルに現前させているのだという。対象の現前が感覚運動的依存性をもつ（回り込む対象が動けば背面が見える）と知っていて、その知識を使っていることができるということが、対象の「見えていない」部分の一種の「現前」を許す条件なのだという (AP63/96)。

しかしながら私はこのノエの説明にいくつか同意できない

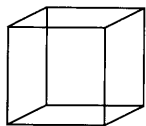
点がある。まず、見えない部分の現前感についていえば、回りこんで見えてくるのは別の正面に過ぎず背面ではない。ノエは、背面を現前するものと見なそうと腐心するが、むしろ背面は隠れているものとして背面である。私は見えていない背面を隠れているものとして感じるのであり、だからこそ対象は立体的に感じられる。裏に回れば正面に見えてくるもの（ないし対象が回転すれば見えてくるもの）、という理解は、今、そこで、トマトの表面と背面との併存を、時間的継起に置き換えてしまう。しかしながら背面は同時にそこあるから背面として立体性を構成しているのであり、継起では立体性が損なわれてしまう。

このような反論に対しては、ノエを弁護して次のように再反論を返してくるひとがいるかもしれない。――背面の現れを視覚的にのみ考えるからこのような議論が生まれる。しかしながら触覚でも対象を立体的に感じることはできる。手を伸ばせばトマトの背面に触れることができる。視覚の感覚運動依存性を通じても触覚のそれを通じても、私は同一の不变構造を取り出すのだとノエは考える（API02102ほか。これについてはあと（四章）で詳しく検討する）から、立体の立体性とは見ることも触れることもできるような立体性である。背面とは向こう側の正面であり、それこそまさに視覚と触覚に共通の真実である、と。

しかしながら現象を見据えることが何より重要である。現象は感覚の固有性の安易な無視を許さない。触覚なら（視覚にとつての）背面も（視覚にとつての）正面と同時に触るこ

とができる。だから、触覚では視覚のような私を中心とした遠近法的な正面、背面の文法は成立しない。触覚もまた別の文法をもっている。この文法の差は近接感覚、遠隔感覚という性質の差においてもっとも顕著である。私が触れるのは近くのものだけであり、遠くは時間をかけてそこまで赴くことによつてしか明らかにならない。同時並行的触覚も可能（トマトの手前と裏側）だが、それは私の身体の届く範囲に限られる。これとは異なり、視覚は遠隔感覚として、距たつたものも同時に――焦点から外れているあたりはぼやけてしまうとはいえ――見ることができるといふ特徴である。だから隔たりを示す奥行きとは、視覚特有の性質であり、触覚には存在しない。ノエの問題は、このような視覚、触覚特有の空間の構造的特徴を無視して共通の空間性に平板化し、そのことで立体性の本質をとりのがしたことである。

それではその「立体性の本質」とは何か。ネッカーの図形（上図）を例に考えてみたい。



この図形は平面上に、透明な立方体の十二の辺すべての投射図が描かれているものである。この図形は、左下側の正方形を手前の面とする立方体と見ることもできるし、そうでなく右上側の正方形を手前だと見、右下の正方形を奥の面とする立方体と見ることもできる。このふたつの見方はどちらも可能であり、ただ同時に両立はしない。左下の正方形を手前と見ることは容易だが、右上の方の正方形を手前に見るのは少々困難を伴う。たとえば右上の正方形に注目しながらそれを「手

前に引き出す」ようなイメージで見ると手前に見えてくる。この図形を見る際、視線は平面上を動きまわるだけであるから、視線自体を「手前に引き出す」ことは実際にはできない。感覚運動依存性（視線の動きと見え方の相関関係）だけで考えれば立体のそれとは決定的に異なる。ノエは、「形態は経験においては感覚運動的・パタンとしてあたえられる」（12）（Ap361E6）と述べ、特定の形態がもつ特定の感覚運動依存性こそ、その形態をそういうものとして知覚させている条件と考える。たしかに私はこれが平面図形であるということとは重々承知している。ただ、それにもかかわらず少なくとも擬似的には立体的に感じられる。だとすれば感覚運動依存性だけで立体の立体的性は成立していないということが示唆されている。何か別の要素が決定的なのである。これはノエの想定していないことである。

問題は、右上の正方形が手前となる立方体として見るために、その正方形を「手前に引き出すようなイメージ」で見るとき、何が生じているのかということである。平面図形を見ている以上、それは両眼の焦点を実際に手前に引き出すことではない。つまりそれは身体的な動きに対応するものではない。むしろ、身体的動作としては現れない、私のなかでのその図形の意味づけにかかわるものであろう。

この「意味づけ」を理解するために、そもそも立体の手前とか奥行きとは何なのか理解せねばならない。たとえば遠くのものを見るとき、私は自分がそのもののある遠くへと赴く感じがする。それに対し近いものは、手を伸ばせば届くとこ

ろにあるもの、実践的な利用可能性をもつものという意味をもって現れる。このように、遠いもの、近いものは私からの客観的距離においてではなく、ましてや三次元的な空間の座標軸上にでもなく、私との生のかかわりにおいて位置づけられ、そこから意味をもつようになる。遠近とは私と対象の関係性の核心であり、そのものとかかわれるかかわれないかを示すものである。だから遠近を私と対象という二物体の客観的な距離として考えるべきではない。奥行きと幅が同じと言える——ノエも奥行きと幅の本質的な違いを見過ごしている——のは、客観的な視点から観察する者にとってだけである。奥行きとは対象にかかわる可能性をもつ者としての私からの対象の隔たりなのであり、奥行きは私との無縁さの指標である。そしてその私と対象のかかわりのあり方が（平面図形であるため対象視のなかにそれを裏付ける所与があたえられていなくても）奥行きの感じの核心をなす。

ネッカーの図形に戻ろう。先の例で私は右上の正方形に対し、あえて「近いもの」、私に緊密な関係をもつものとしてかかわろうとしたのである。その面を「引き出す」とは、他のいくつもの面のなかからその面をもっとも「近いもの」として位置づけることである。そういうものを見る時の実存的なかわりの姿勢をもつて見たのである。その私の実存的なかわり方が、右上の正方形に近いものとして意味づけ、同時にその面を手前とする立方体としての見えが組織されたのである。こういう私のかかわり方がなければ、それぞれの面は私にとって「遠近」の差のない平面にとどまったであろう（実

際、まったくの平面図形としてみることも可能である)。つまり、私が対象を生きる仕方が立体感、遠近感という対象の性質、認知の不可欠な構成要素だと言えよう。そして、客観的な関係でなく、私の対象とのかかわり方だから、私の側で手前のものへのかかわり方を取ることによって、図形のうちに立体感が擬似的にはあれ形成できるのである。こうして私の実存的なかわりが立体の見え(立体だという判断でなく)を形作る(少なくともその一部は)。単なる思考だけによって立体だという判断を下したのなら立体と見えるはずもないが、実存がかかわっているから、立体として見えるということも可能になってくるのである(この点について詳しくは本稿最終章参照)。

このような実存的なかわりによる意味づけは、感覚運動依存性だけで説明できない。感覚運動依存性は空間内での運動とその感覚への関係を表すだけであり、実存的主観的なかわり方は、その外にある。

たしかに立体視は知覚対象を構成するカテゴリーのひとつに過ぎない。それ以外にもさまざまなカテゴリーがあり、それぞれには実存のかかわりに濃淡がある。ただ、このカテゴリーは三次元知覚の根幹をなす非常に重要なカテゴリーである。それゆえそのカテゴリーにおいて実存のかかわりが不可欠と示せたことだけでも、知覚における実存のかかわりを無視することが不適切だと指摘するには十分であろう。

ノエの非様相的知覚の説明は成功していないと判明した。そのため非様相的知覚のひとつの例として、非様相的知覚以

外の一般の知覚的現前の感覚を説明する彼の手法もうまくいつていないと判断せざるをえない。非様相的知覚との類比という手法に関連した批判はこれくらいにするが、ただ、この類比と切り離して、ノエが一般の「知覚的現前の感覚」について与える説明そのものをもう少し検討しておきたい。

彼は視野周辺部へのアクセシ可能性が「知覚的現前の感覚」を感じる理由だという。しかし私見ではアクセシ可能性はせいぜい「知覚的現前の感覚」の条件のひとつに過ぎない。次のような例で考えてみよう。闇夜に、懐中電灯で闇に沈んでいる細部を照らし出す。私は電灯を向ければ即座に細部を知ることができる。だからノエが「知覚的現前の感覚」の条件だという即座のアクセシ可能性は保証されている。にもかかわらず私は照明で照らされている部分以外の詳細を同時に保持しているなどとまったく思わない。私はむしろ闇の未知感に押しつぶされている。照らし出されているほんの小さな部分以外は、私にとって未知だと私ははっきり感じる。

少なくとも言えることは、背景が闇の中に沈んでいるのではなく、ぼんやりとはあれ背景が見えていることが、細部について「知覚的現前の感覚」をもつための必要条件だということである。しかしながら、このぼんやりと背景が見えているという事実だけでは詳細を見ているという感じをもつ十分条件といえない。全体の詳細を表象していると思えるのは、現実を見ているというある種の確信——私が以下で「存在論的既知感」と呼ぶもの——に支えられている。ただ、この概念を説明する前に、「知覚的現前の感覚」が詳細に現前して

いるという錯覚を与えるものだという、周辺部ないし背景というものの性格について検討しておく必要がある。

現在の実用的な必要にもつばらかわかるのは注意の焦点である。これに対し、注意が向けられていない背景は、これ以上注意を向けて情報を集める必要がない領域である。必要がないのは、実践の必要性が乏しいからそもそも情報を集める必要が乏しいという理由や、あるいはすでにその必要性を満たす程度までは十分知られているという理由、また、両者の複合であろう。したがって、私にとって周辺部、背景とは、ほとんどの場合、「必要をみたすだけは知られたもの」である。

一方、この例外、つまり必要な知識が知られてないまま背景にとどまっているという状態は、私にとって大きな不安を引き起こす。そのとき私は、今この瞬間の注意の焦点に安住できず、落ち着きなくその背景に目を向け直し、情報を探ることになるだろう。襲撃を警戒しているときなどは、こういう状態に陥る。しかしながらそういう例外的状況を除けば、私にとって背景は「（必要をみたすだけ）知られたもの」である。これは、単に多くの場合こうだということではない。事実上既知であるかどうかという事実的問題だけで既知感が生じてくるのでなく、私が背景世界をどういうものと位置づけそれにかかわることと存在するかという、背景世界との存在論的關係によつて決まってくる。実際には私の知識はごく限られており、「不注意盲」（本章冒頭で触れた）の実験が示すように、私は注意の外の背景の変化には、それがかなり大きなもの、重要なものでも気づかない。私は背景を捨象して

いるのである。ただ、このような捨象なくしては、焦眉の急である注意の焦点への注目を阻害されてしまうだろう。これは私の生にとって好ましいことではない。生きられる場としての世界において、背景は無視しても問題ないもの、不安をあたえないものと意味づけられた領域である。

背景の既知性の位置づけは、こういう存在論的、実存的機能を有している。そのためこの既知感を「存在論的既知感」と呼ぼう。視野が細部まで既知だという「知覚的現前の感覚」も、この背景のもつ既知感に根ざしていると考えられる。だから闇夜の懐中電灯の例のように、単にアクセス可能だけでは現前感覚は生じないのである。

三 感覚運動依存性の検討

最初に述べたように、感覚運動依存性に基づいて営まれることが知覚にとつて不可欠であるという主張は、エナクティビズムの基本主張である。知覚とはスナップショットのような静的所与を元にした内的表象形成でない。知覚とは身体やまなざしを能動的に動かしながらなす情報収集に基づく。そのため感覚運動依存性をうまく使いこなすことは知覚が成功する条件である。

ただ、ノエ自身のなかでも感覚運動依存性の利用の仕方を叙述に二極がある。そのこともあって、彼が感覚運動依存性を利用するということが具体的にどういうことがらを考えているのか判然としない。一方で幾何学的な見えの厳密な理解とその活用を示唆する記述もある（とりわけノエが「遠近法

的特性」と呼ぶものに関して)。もちろん、現出と運動の関係性の、文字通りの幾何学的な定式を、実践者たるわれわれが経験から導きだしたり使いこなしたりできるものと思えないから、幾何学的な厳密な定式化が可能な事態を、実際はそれに近似的な実用に足るレベルの定式化によって活用しているということであろう。これについてはある意味常識的伝統的な考えなので、細かく説明するまでもないだろう。

ただ、他方で必ずしもこのような幾何学的理解の近似とは位置づけられないような、別系統の実践的実用的な把握を示唆する箇所もある（AP23-24(35-36)〔3〕）。後者について少し説明したい。

私の眼前には一軒の家がある。今は隠れて見えない家の右の面を見るには家の右に回り込めばよい。このような感覚と運動の相關関係の知識は、知覚を遂行し、それに基づいて実践を成し遂げていく上で必須である。ただ、こういう感覚運動依存性はあくまで実践知であって、両者の相關関係の正確な知識——たとえば幾何学的知識——ではない。そういうものを理解し使用することは知覚者にとって負担が重すぎるだけでなく、必要でもない。あらかじめ計算するなら、それは家の前面の右隅までの距離を目算し、回り込むまで何歩歩く必要があるか計算するという作業だろうが、この計算は共にかなり難しい（スイカ割りの難しさを想起してほしい）。しかし実際は、正面の右隅に着くまで歩いてみて、着いたら回り込めばよいのである。回り込んでみて、家の右面を一望に見るには近すぎたり遠すぎたりすれば、家との距離もその時

点で調節すればよい。この場合に必要な感覚運動依存性の知識とは、実践の用途をみたす限りの大ざっぱな知である。視覚情報から家の外壁の平面図を頭の中に描いてみることも、あらかじめの膨大な計算も必要なく、身体運動とそれに対応する感覚の変化との大まかな傾向を知っておけば十分である。

このような感覚運動依存性の把握は幾何学的で正確な家の見えの把握の近似値ではない（それと相容れないものではないが、目的が幾何学的の把握と異なるから内実も異なる）。それゆえに、ノエのなかにある先述のふたつの「感覚運動依存性」像は、感覚運動依存性の具体像を描く妨げとなる。彼の著作を読んでも、「感覚運動依存性」の具体像が明瞭に思い描けないのは私だけだろうか。おそらくは後で述べたタイプの「感覚運動依存性」こそ、私たちが実践のなかで使用しているものである。前者にノエがこだわるのは、次章で触れる思考と知覚の連続性についての彼の主張のひとつの帰結であろう。しかし同じく次章で見えるようにこの主張自体は認しがたいから、前者の「感覚運動依存性」観も是認できない。

ただ、仮に後者のように「感覚運動依存性」を理解するとしても、なお、この概念には問題が残る。感覚運動依存性の知覚における役割は、ノエが考えるほど大きなものかという点である。

具体的な認知の場面で考えてみるのが重要である。私の三歳の息子にはお気に入りの緑のタオルがあるが、あちこちもち歩き置き忘れては探している。一見、対象を見つけるときに普通最良の手がかりになるのは、感覚運動依存性の典型

とも言える形態に関する感覚運動依存性だと考えたくなる（ノエもそう考えるであろう）である。しかし今の場合、タオルの形態は無数かつ非常に複雑で、その都度形態が異なる。科学者ならいざ知らず、知覚するわれわれにとつて、感覚運動依存性の最初の解釈にしたがつてタオルの形態の幾何学的定式化を行なうことは不可能である。かといって第二の解釈に相当するような、別タイプの感覚運動依存性を息子が利用しているわけでもあるまい。息子はおそらくタオルの緑色で目星をつけて、触った手触りなどで知るのであろう。つまり、対象識別に形態に関する感覚運動依存性は大きな役割を果たしていない。

たしかに感覚運動依存性とあまり縁がないように思える色も、感覚運動依存性と無縁ではない。ノエによれば、「対象の色とはまさに、見かけの色が視覚条件が変化するにつれて変化する仕方である」（API11228）。つまり「視覚条件」には照明の具合などの外的条件に並んで、私が身体運動によつて変化させうる条件、たとえば照らされている色壁面への私の角度、それに応じ壁面が反射して見えるかどうか等々も含まれる。だから直前の引用に言う、そういう「条件」で「見かけの色が……変化する仕方」とは、部分的に「感覚運動依存性」と重なる。

もちろん、こういう法則性が重要な役割をもち、私がそれを「考慮に入れて」知覚していることは間違いない。しかし、先の緑のタオルの例で、照明と色に関する高度な知識は同定のために必要と思われない。多くの好適な条件では、緑と見

えれば息子はタオルを同定できる。不適な条件、たとえば色が照明下と変わつて見える陰にタオルがある場合でも、陰での色の変化に関する高度な知識をもっている必要はない。一応緑の色合いが見えるほどの暗さなら、彼は緑のタオルと思つてそれに手を伸ばすだろう。明るいところにもつて出て判断することもできる。そもそも知覚は万能の道具ではないから、陰での色の見え方を知らなくても、このことでひとつ制限が追加されるだけで、知覚が不可能になるわけでもない。対象に焦点を合わせるだけの感覚運動依存性が駆使できれば、息子でも多くの場合、陰にあるタオルを見つけられる。この同定の際の感覚運動依存性のかかわりは、形式的一般的なものでしかない。これに対し、タオルの色が緑であつたという知識は、同定の実質にかかわる実質的なものである（少なくともわが子の場合）。たしかに対象に焦点を合わせることや形態を見て取ることが眼球運動に関する感覚運動依存性に基づく以上、ほとんどすべての知覚において感覚運動依存性が知覚の条件であることは間違いない。ただそれは実践において実質的決定的な条件とも限らないのである。

目的をもつた行動のひとつの道具として感覚運動依存性の知識をとらえるべきである。実践の文脈のなかに置いてみれば、先の例が示すように感覚運動依存性の知識の役割はノエの考えるほど絶対的なものではない。対象の形態知に関する感覚運動依存性、色の見えに関するそれ、いずれも初歩から高度なものまで程度の差があるのだが、タオルの同定ならごくごく初歩的なもので十分である。知覚はいずれにせよ実践

の一環であり、感覚運動依存性の知識も実践のなかで使用されるものである。その実践はその都度の目的に従属しており、だからこそ感覚運動依存性の知識も、個々の実践と目的から独立した、実践に一般的なあり方をするものではない。したがって感覚運動依存性の知識だけを知覚において普遍的、独立な知識であるかのように、また決定的な要素のように考えるノエの仕方は、実際の知覚のなか——それはすなわち実践のなかということだが——での感覚運動依存性の働きを描くには不適切である。彼の「感覚運動依存性」観が具体的にはよく分からないのは、先述のように彼の「感覚運動依存性」観に二極があるということだけでなく、今述べたように、感覚運動依存性を十分具体的な文脈のなかで考えられないような特異な出発点をとっているからでもある。

四 知覚と思考

前章では感覚運動依存性への習熟という観点で知覚を眺めるエナクティブイズムの試みを見た。だが、このように知覚をとらえるとき、知覚とは感覚運動依存性を駆使し身体を手段として利用する時間的幅をもつ情報収集に基づく判断のようにも見えてくる。つまり、思考との差があるのだろうかという疑問が生じる。スナップショット説の知覚観のように知覚が受動的な一瞬の出来事であるのなら、知覚と判断の区別は容易かもしれない。しかしエナクティブイズムの主張が正しくて、スナップショットに基づき再構成された内的表象が知覚において決定的な役割を果たすものではないとすれば、余計

に知覚と判断の差はいまいになる。

むしろノエはあえて知覚と思考を連続的にとらえようとする。知覚と思考の差はせいぜい前者が命題的でない実践的レベルの知識に依存しているという点（AP117-8/187-8）に見いだされるにすぎないという。ノエが知覚と思考の連続性を強調するのは、知覚が受動的なものでなく、情報探索のための身体活動に基づく能動的なものということを強調する意図からである。この能動性の強調という意図はエナクティブイズムの基本的な方針であるから納得できる。しかしながらこのことが知覚独自の性格の軽視につながっていることは看過できない。思考と知覚の差異の確定というわれわれの論点にかかわる限りで、思考に還元できない知覚の独自性について確認しておこう。

ただ、私はここで正面から思考と知覚の異同を問おうとするわけではない。もしそうしようとすれば、両者の連続性を強調する意図でノエがとる知覚概念説の検討や、概念説・非概念説の論争の検討など、かなり細かな論点に立ち入らざるを得なくなる。私はこういう論点に踏み込むのではなく、知覚を思考に近づけて見ようとするノエの強調しなかった、重要な論点を指摘するにとどめたい。

知覚的現出は、以下の条件を満たしている。

- ① 知覚的現出は対象そのものが直接ありのままの姿で現れていると私は理解している。私が知覚するとき、色は対象そのものの色であり、主観的なものと思われていない。
- ② 知覚的現出は、ここから知覚されたもの、今知覚されてい

るものとして現れてくる。そしてそのことが現出自体の意味の構成要素をなしている。そして、「今」だからこそ、私の身体活動が同時に感覚内容に影響するという感覚運動依存性も生じる。この②の条件は、知覚的現出には身体的な知覚が必然的にかかわり、そのため、身体がある「今ここ」による制約を被ることから来る（遠隔知覚の場合なら対象は「ここにある」とは限らないが、身体の「ここ」との関係性のなかにある）。

③継続反復的な真理確認可能性。サイコロを知覚しているなら、手に持って回せばどういふ見え方を次の瞬間にするかは感覚運動依存性によって大まかに予想されている。そして知覚の瞬間瞬間においてその予想が確認され、あるいは裏切られていく。つまり、知覚の過程は「サイコロを知覚している」という私の信念に基づく予想の確認、否定を通じて、私の信念を継続的・反復的に確認（ないし否定、修正）してゆく過程なのである。私見では③は本章で詳説する知覚と思考による判断との差の重要な一環を形成する。思考も信念を検証することができ、それは③のような継続反復的なリアルタイムのそれではない（少なくとも思考にとつて③のような条件をもつことは必然ではない）。この継続反復性が知覚の真理・確信の重要な源泉だと私は考える（後述するように、これだけでそういう確信が形成可能なわけではない）。

なお、①と②は、知覚者が（非命題的に）自覚している、常識的な知覚現出の特徴である。一方、③は知覚者が自覚している必要がないし、実際、自覚していると限らない。また、

この③は②の同時性ゆえに可能になる。ただ、③の保証する真実性を欠けば、知覚のそのものの性（①）、今ここによる制約性（②）も無意味になってしまう。また、今ここからの知覚という②の性格は、①の直接現前にある意味含意されている。このように①と③はそれぞれ独立の三性格というわけではない。複雑にかかわり、前提しあっている。

ノエももちろん①、②の常識的な知覚的現出の性格は重々承知である。しかし、彼は思考との連続性を強調する余り、こういった知覚的現出の基本構造の意義を軽視する。とりわけ思考との不連続性を際立たせる③について、彼がそれに注目する様子はない。

まず、①の直接現前性から考えてみよう。これは知覚される姿が対象そのものの姿だということを意味するが、これは視、触、聴覚に現れる対象の多様な現出形態と一見矛盾するかに見える。この「矛盾」の解決がいかにか実現されているかを検討することを通じて、直接現前性の本質に踏み込んでみたい。

ノエは『知覚のなかの行為』二章の題辞で「視覚とは目による触診である」というメルロ＝ポンティのことは目を引用している。しかし彼はそのことをメルロ＝ポンティの意図から離れ、文字通りにとらえて、視、触覚に共通の構造を証言するものと理解している。「もしあるものが四角く見えるなら、それぞれの角を見るためには、目や頭をある特徴的な仕方で動かさなければならぬだろう。またそれぞれの角を触るためには、手を（ある適切な抽象化のレベルにおいて

は)同じ仕方、動かさなければならぬ」(AP102163)。ノエはデカルトの盲人のたとえをもちだして語るが、視覚のすべてが基本的には触覚的なものに還元されると考えるわけではない。視覚と触覚が同じ空間で成り立つということを示すために、その限りで視、触覚どちらにおいても共通に取り出せる対象の構造——幾何学的構造を想定している——を語るだけで、共通性の成り立たない感覚固有なレベルが存在することを認めないわけではない。(AP110175)。たしかにノエのこの解決が、真に適切かは疑問も残る。しかし、少なくとも何らかの部分的な空間構造の同一性が視覚空間と触覚空間の間に成り立つということが両空間の同一性をわれわれが認識する際に不可欠だ、という彼の考えについては十分理解できる。

ただ、彼の議論にはもつと本質的な問題点があるように思われる。彼はこの議論において、視覚と触覚が同一の空間にかかわるという性格をもつことを、知覚によって同一の構造がとりだせるという経験的事実だけで十分根拠づけられると考えている。しかし私はそれだけで十分とは思わない。視覚や触覚等、すべての感覚が同一の世界にかかわるということは、経験的に確認立証されるような事実ではないからである。知覚が世界そのものをあたえるという前提の直接の帰結として、両者の対応はいわば「ア・プリオリ」に前提されている。むしろこの対応の前提が両者の経験レベルでの関係の発見を促し、その発見によってその前提が立証されるのであって、対応関係の認識が経験によって無から構築されるのではない。

だからもし対応関係が見いだせなかった場合には、例外的に世界から締め出されることとなる(夢や誤謬がそうであるように)。

この諸感覚の対応の前提も、二章で見た「存在論的既知感」と同様、一種存在論的な性格をもっていると言える。世界というものの存在論的性格、それに知覚という手段でかわっている私の存在論的性格、それらが両者の絆である知覚に世界そのものをあたえるという特別な地位をあたえる。知覚の手段である視、触覚が同一の世界にかかわるという性格を帯びるのは、まさにそれぞれがこの性格をもつことに由来する。

右に述べた世界そのものをあたえるという知覚の「ア・プリオリ」な性格(①)を「存在論的知覚性格」と呼ぶことにしよう。ただ、「存在論的知覚性格」と呼ぶべき性格はこの性格だけではない。先に知覚的現出の性格の②として述べた、知覚的所与が「今・ここ」に制約された現出様態をもつという性格についても同様である。視覚の場合、私は遠方を見ることができるが、その遠方も私の目のあるここに決定的に制約されている。ほかの感覚も同様の制約を負う。そして、今のことしか知覚できない。知覚は身体的な営みであり、それゆえ私の身体のある今、ここを中心とした時間、空間に拘束されており、その意味で、「今・ここ」による制約①をもつ。そしてこの点についても、①の知覚対象の直接現前性と同様、一種の存在論的資格を有する。そのため事実的な今・この制約の外でも、知覚対象という位置づけを受けたものは、今・この制約を受けるもののごとくに現れる。例えば私の前にあ

るモニターに別の場所では以前録画された映像が映っているとしても、その内容に没入しているとき私は、画像の出来事が今、ここで生じている——しかもそのもの自体を直接見ている——かのように感じることもある。その所与は今この私と共時的で場を共にする特別な関係のなかにあるものとしての性格をもつのである。今この事実でないかと私が知っている、そういう感じをもつて見てしまうことがある（モニターでの「知覚」は複雑な問題ををはらんでいるので、あとで再びこれについて論じる）。

なお、③については、必ずしも知覚主体が自覚しているとは限らない性格なので、「存在論的知覚性格」に含めることはできない。「存在論的知覚性格」は①と②のみである。

さて、以上の議論を踏まえて、思考と知覚の違いについて述べてみたい。

何よりもまず、この「存在論的知覚性格」をもちうるかどうか、思考と知覚の差である。にもかかわらずノエは両者の間にあるこのような存在論的な差を見ず、その差を事実的な違いでしかなくいかのように考えている。しかし、ここでもう一步進めて考えてみよう。どうして知覚がもつこのような性格を思考はもたないのか。ノエの考え方の帰結を突き詰めていくことで、その差を形作る決定的な点をあぶり出してみたい。

彼の理解に基づく限り、知覚とは、身体を手段として使つて得られる情報を分析し、外界を理解することにすぎないように思われる。この理解に基づけば、身体は情報獲得の手段

ではない。だとすれば機械を操作して情報を集め、その情報——数値化されたデータ——を分析して外界の実像について判断することは、知覚と本質的な差がないはずである。というのまたたとえば身体でなく機械による情報収集を行う場合でも、機械の感覚運動依存性を十分に理解していなければ情報を適切に収集し正しく分析することはできない。つまり身体は感覚運動依存性の点でも、ほかのさまざまな外界の情報収集手段のひとつ以上の役割を果たしていることにならないからである。

しかしながら当然、このような機械の媒介によって世界の情報を集めても、私は「知覚している」という感覚をもつことはない。つまり「存在論的知覚性格」を感じることはない。機械との差はどこにあるのか。問題は「存在論的知覚性格」①と②を可能にしている条件である。それは既に確認したが、第一に、③の条件、つまり継続反復的な真理確認可能性である。知覚においては、つねに対象の見えに関する予期が働き、それが刻一刻とみだされてゆく。そのことで、自分の知覚的信念が繰り返し返し確認されていく。場合によっては信念が裏切られることもあるが、その場合は先の信念が修正ないし破棄され、その新しい信念に基づいて同様の確認が得られていく。これに対し、機械を媒介した情報収集とその解釈は、③のような反復確認をなすものである必要は全くない。むしろ一般的には、集まったデータを元に一回で結論を出すものである。それだけで信念を確認する（確認はもつぱら信念の帰結である予期の確認という形をとる）には十分である。確認に

不十分な場合はもう一度情報を集め直すこともあるが、継続反復性自体が不可欠であるとか、何か特別な意味をもつとかいうわけではない。一方、反復確認のない知覚とは一瞬の知覚である。このような知覚は真の知覚と言い難い。知覚心理学が実験室でこういうタイプの知覚の実験に偏重し、知覚の真の姿を見失ってきたというのは、エナクティビズムの強調するところである。感覚運動依存性を重視するエナクティビズムは、身体運動とその感覚への影響の予期が知覚の過程で果たす中心的役割に注意を向けようとする。予期のかなりの部分は感覚運動依存性の知識によって可能になっている。だが、ノエはエナクティビズムの立場から容易に取り出せそうな③の条件を明言しないし、③が知覚の真理性の確信を裏付けていることにも言及しない。その理由はおそらく先述のように、この条件が思考と知覚の差異を形作るものだからである。

③において、つねに継続的に信念の確証がなされることが確信を生むとともに、それが②のリアルタイム性、此処からの規定性の条件となっている。私の首の動きがリアルタイムで見えの動きとして反映される。そして私の動きに相關する見えは、私のいることとの関連性をつねに私に自覚させている。知覚は今ここによる制約から離れられない。これに對し、思考にとっては、今ここは積極的な意味をもたない。情報が過去のものであれ現在のものであれ、このものであれ彼方のものであれ、同じように判断を下すことができる。

なお、知覚において継続反復的に確証される信念には、対

象そのものがあたえられているということ(①)が含意されている。単に「私の部屋に机がある」という信念なら、私が今見ることも触ることもできないところにあるのかもしれないが、知覚において確認される信念はそういうものではない。「机がそこにあり、私はその机そのものを見ている」というようなことが——もちろん非命題的に——含意されているのである。

ただ、ひとつ注意しておくべきことは、③が備われば必然的因果的に「存在論的知覚性格」をもつようになるわけではないということである。むしろもし①と②がそういう仕方では生み出されるなら、①と②は「存在論的」というにふさわしくないだろう。対象が事実にどうであるかということだけで決まるのではなく、それとある程度独立に、私の側の世界、対象へのかかわり方が、そういう性格を形作るのである。だから逆に条件が整っても、主体の世界へのかかわり方次第では、「存在論的知覚性格」は成立しない。たとえば「離人症」は一種の現実感喪失であり、「存在論的知覚性格」が欠如する症状と言えよう。しかし③の条件が満たされていないわけではない。

ところで、実は③の条件だけが「存在論的知覚性格」を可能にする条件ではない。今まで言及しなかった別の条件(④とする)があると私は考えている。先述の機械の例をより具体的にしておいてこの点を検討してみよう。

私は浅い池の底に棒を差し込んだり引いたりして、その手応えに池底が粘性ある泥か固い石か感じ取る。私はこのとき、

「手応えを通じて池の底の粘度、硬度を推測している」というより、それを「棒で触っている」と言いたくなるような感じをもつ。

同様のことを機械にやらせるとしよう。機械は池底に棒を突っ込んだり引いたりするが、その際の力の大きさ、また棒が泥のどこまで潜り込んだか、その深度が、計器の上に数値で示される。その数値から私は池底のおおよその様子を知ることが出来る。泥なら押し引きにある程度抵抗を示す（深さがほとんど変わらない）が、一定の力になると急激に棒が動く。硬い岩なら、いくら力を入れても動かない。数字の変動から池底の様子は推測できるし、熟練すれば数字からすぐに池底の状態が読み取れるだろう。池底の泥から今、棒が抜けたとありありと思い浮かべることもできるかもしれない。しかしながら私は、泥を「知覚」していると思うことはない。手にもった棒で池底をつつくときは違うのである。

どこが違うのか。私が棒をもつ手に感じているのは、泥に手をつ突っ込んだときに感じるのと同質の具体的な構造をもつ感覚である。押すことに抵抗するが、同様の抵抗を示す弾力あるものとは異なり、引いたときにも抵抗し、私を逃すまいとする。しかしその抵抗もある限度をこえると一挙に失われる。このような、粘つくものがあたえる反応と同等の反応、つまり粘つくものに手や指を突っ込むときそれが私に対して示す一種のスタイルが、棒をもつ私の手に具体的な構造を保ったまま伝わってきている——突っ込む手指へのべたつく皮膚感覚は棒の場合に対応物をもたないが、それを押し込む

腕の筋肉の力の具合、手応えが棒を押し込むときのそれに対応している——のである。だからこそ私は今までの知覚の延長線上で、「泥という例のものに棒で触れている」という確信をもつこともできるのである。そのため手で触れた場合と同様の「存在論的な知覚性格」をもつことが可能なのである。これと対照的に、計器の数字ではそういう具体的な構造の感覚は欠如している。私は頭のなかで、数字を世界内での知覚の意味（泥の粘性）に変換しなければならぬ。たとえ数字が同時的にあたえられているにしても、また、力を弱めたり強めたりした結果がリアルタイムに棒の深度に反映されるという意味で、対象（池底）のあり方と相互関係しているとしても、私は今そこに直接対象が現れていてそれを知覚しているという感覚はもたない。私の前には数値があるだけで、具体的な対象のあり方、とりわけ何度も体験した形で（現前（触覚的に）あたえられる粘つきないしその具体的等価物）が欠けているからである。数値は思考のレベルでは粘性をもつものが存在するという確信を与えることができるかもしれない。しかしそれは直接対象が与えられているという確信①にはつながらない。数値は抽象的であり、抽象的なものが対象そのものの意義を担うことはできないからである。また、数値が何かをあたえるとしてもそれは直接の所与性でないから、それが今あるものと明確に感じられない。身体のある「ここ」との関係性のなかにも感じられない。つまり②もみたされない。

したがって、「存在論的知覚性格」をみだすための次のよ

うな条件が存在すると言える。④知覚としてあたえられる情報は具体性をもつことが必要であり、同等の具体的構造が与えられる場合は、間接的でも、手段が異なっても、同じもの（泥）として受け取られる。

ところで④はノエが「感覚運動依存性」として考えている条件とどう違うのか。棒を使って感じられるものは、手指を使った感覚と感覚運動依存性に関してある程度類似した構造のものになりそうである。しかも、感覚運動依存性に従う現出で刻々現れるのはもちろん具体的な対象の姿である。ノエは、「ひとは皿が円いということ」を、たとえば皿が楕円形に見えるという感覚の証拠に基づいて、考えるのではない。ひとはその円さを、感覚運動的側面に精通することによって経験するのである」(AP85/136)と語り、具体的構造が知覚的経験にとって必須であること示唆する。われわれが言っていることはノエが「感覚運動依存性」という概念で語っていたことと同じでないのか。

彼との差は、ひとつには既に述べたように、知覚の帯びる性格の存在論性を明確に認識しているかどうかという点である。もうひとつの差は、「感覚運動依存性」がわれわれのいう「具体的構造」の全面を覆うことがないという点である。たとえば先に触れたように、モニターの平面像に対象所与の直接性を感じることがあるし、また幼児も写真に写っているものを容易に同定する。しかし、同じ対象でも現実の三次元とその画像の二次元では、首の動きに画像が三次元立体のような変化を見せないということなど、感覚運動依存性におい

て明らかな差がある。それにもかかわらず幼児さえ容易に同定できたり、知覚的直接所与性を感じることができるといえるのは、感覚運動依存性がかなりかけ離れていても、私は「存在論的知覚性格」を感じられることを示している。これは前章のタオルの例で確認したことでもある。同じ例で、感覚運動依存性が決定的といえない色による同定についても見た。対象同定において決定的であるものは感覚運動依存性だけではない。それ以外にも様々なものが決定的要因でありうる。私が暫定的に「具体的構造」という名で呼んできたのは同定にかかわる対象のそういう具体的性質である。

ところで、どうして具体的等構造を示すならある意味「間接的」でも「存在論的知覚性格」を担えるのか。知覚は思考と異なり、意志、思考する人格的な主体に先行する、人格的な主体の層で営まれるとメルロ＝ポンティは言う（この点ではノエも基本的に異論がないはずである）。それが正しいとすると、数値化されたデータのような抽象的なものについて、それを何かを表すものと受け取るということとは前人格的主体の管轄する事項ではない。他方、具体的な等構造を扱うことは前人格的主体にもできる。知覚のレベル内でも同等性はつねに問題になりうるのだから。これとあれが同じ色のものだというような「認識」は、思考を待たずすでに知覚のなかで働いている。

問題の焦点は「存在論的知覚性格」である。それを知覚にあたえるのはどちらだろうか。人格的主体はそれをあたえないだろう。なぜなら人格的主体があたえることもできる

なら剥奪もできるはずだからである。「存在論的知覚性格」は世界の基本性格であり、世界からそれが失われれば私の存在も揺るがされるような私と世界との基盤である。それが失われれば、世界は懐疑のなかに崩れ落ち私の生の営みも危うくなるが、実際は懐疑論者ものうのと生きている。それはある意味において、懐疑が頭の中だけの遊びだからである。したがって「存在論的知覚性格」は、思考の恣意に先行するレベルのものでなければならぬ。このことは生の必然である。

これに対して、「存在論的知覚性格」が前人格的主体によって担われているのだとすれば、同じ前人格的主体が担う具体的等構造化だけに「存在論的知覚性格」があたえられるというのもごく当たり前のことである。手で棒を池底に突っ込んでも池底の触知が可能なのに、池底に棒を突っ込む機械の数値データでは知覚が可能でないのは、このような理由からだと説明できる。

なお、最後に断っておくが、「存在論的知覚性格」をなす二条件と、その前提となる二条件とをとりあげたが、私はどちらについても二つずつすべてだと考えているわけではない。思考と知覚との差異を明確化するという本章の文脈で、触れざるをえない条件に限定して検討したものである。

結論

エナクティビズムは、静的な知覚観、表象形成としての知覚観を覆し、環境への動的な働きかけ、活動としての知覚観

を明確に打ち出した点で功績は大きい。メルロ＝ポンティでもこのような精細な行動的知覚観を打ち出すことはできなかった。しかし、メルロ＝ポンティにあつてノエに欠けているのは、主体を実存的に見る見方である。主体とは環境から情報を集める知的主体ではない。情報は生きるための情報であり、環境は主体が生きる場である。その実存的な意味の裏打ちが知覚においてはつねに働いている。それを軽視し、感覚と運動の相関の分析が究極の次元であるかのように語ることで、ノエはあたかも知覚とは客観的な空間情報の収集であるかのように見なししている。このことが、彼が身体的情報収集に基づく思考による判断と知覚との差異を軽視することにもつながった。本稿で扱ったノエの主張については、一、三、五章の主張はエナクティビズムにとつて避けられない問題へのノエなりの回答であり、エナクティビズムのなかでは有力な回答のひとつであろう。一方、四章のものは必ずしもエナクティビズムに広く支持を得ている姿勢とは思えない。そのため、私の批判がエナクティビズムのすべてに該当するわけではない。ただ、まだいろいろな方向に動いていく可能性を秘めているのがエナクティビズムであるから、私のような批判も、エナクティビズムの進むべき方向と進むべきでない方向とを示唆するために、わずかながらも裨益しうらと思つてゐる。

【註】

- (1) E. Thompson, *Mind in Life*, Harvard U. P., 2007, p. 13.

- (2) F. J. Varela, E. Thompson, & E. Rosch, *The Embodied Mind*, MIT Press, 1991, p. 177. (邦訳『身体化された心』工作舎、二五一頁。) 引用中の……は中略。
- (3) Sensorimotor contingencies (感覚運動付随性) という語もほぼ同義で使われ、むしろこの方がエナクティビズムの用語としては一般的である。ただ、先の語の方が誤解を生じにくいので、本稿では Sensorimotor dependencies (感覚運動依存性) に統一する。
- (4) AP は以下の著作の略号。この著作からの引用ないし参照箇所を示す場合は、本文中にこの略号とともに示す。スラッシュの前の数字が原著、あとの数字が邦訳書 A. Noë, *Action in Perception*, MIT Press, 2004. (邦訳『知覚のなかの行為』春秋社)。
- (5) 直前の註参照。
- (6) ノエに対し同様の評価をするものとして、J. Stewart et al., Introduction, in Stewart et al. (eds.), *Enaction*, MIT Press, 2010, p. xiii.
- (7) たゞえば註1前掲書。
- (8) ノエの協力者オリーガンによる以下の論文参照。J. K. O'Regan, Solving the "Real" Mysteries of Visual World, in *Canadian Journal of Psychology* 46:3, University of Toronto Press, 1992.
- (9) M. Merleau-Ponty, *Causseries 1948*, Seuil, 2002, pp. 20-21. (邦訳『知覚の哲学』ちくま学芸文庫、六九一七〇頁)
- (10) O'Regan 前掲論文
- (11) たゞ「Noë, Is the Visual World a Grand Illusion?», in Noë (ed.), *Is the Visual World a Grand Illusion?*, Imprint Academic, 2002, p. 9.
- (12) 引用文中の傍点は原文イタリック。
- (13) ノエがセカンド・オーダーである以下の論文においても同様の理解が見られる。O'Regan and Noë, A Sensorimotor Account of Vision and Visual Consciousness, in *Behavioral and Brain Sciences* 24, Cambridge U. P., 2001, p. 943.
- (14) Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Gallimard, 1964, p. 177. (邦訳『見えるものと見えないもの』みすず書房、一八六頁。)